

2009年度
キネマ旬報
ベストテン8位入選

2008年度
文部科学省選定
(少年・青年・成人向け)

奏でる歓び
生きる歓び

1枚の五円玉が心をつなぐ感動のドキュメンタリー

第三回『ご縁玉・プロジェクト』

INTERBAY FILMS PRESENTE

ご縁玉

GOENDAMA

パリから大分へ

監督：江口 方康

出演：山田 泉 / エリック=マリア クチュリエ

2011年2月27日(日)

13:30~16:20(開場12:30~)

就実高等学校・中学校6F
就実なでしこホール

岡山市北区弓之町14-23

(場所は裏面地図を参照して下さい)

内容 ①映画「ご縁玉」上映
②江口方康監督のトーク
③エリック=マリア クチュリエのチェロ演奏

参加費(前売り) 一般2000円(当日2500円)
大学・高校・中学生1000円 小学生500円

主催：私たちのまち・岡山を考える市民のつどい「教育・子育て委員会」

TEL086-232-9714

後援：岡山市教育委員会

映画『ご縁玉』について

がんとの闘病生活の傍ら、「いのちの授業」を続け、2008年11月に49歳で亡くなった元養護教師山田泉さん(山ちゃん)=大分県豊後高田市出身。2000年に乳がんを告知された山ちゃんは小中学校などで生と死について語る「いのちの授業」を開催し続けた。「最後の海外旅行」と、2007年9月に旅立ったフランスで、ベトナム戦争孤児のエリック=マリア(チェリスト)と出会った。言葉は通じないながらも、音楽や気持ちで通じた2人の交流は、山ちゃんの帰国後も続き、山ちゃんからもらった五円玉に惹かれるように日本を訪れたエリック=マリアは、彼女に連れられ、ホスピスや養護施設で演奏会を開くことになる。その模様を収めたのが、このドキュメンタリー映画『ご縁玉』です。

偶然の出会いであったことが必然となり、また偶然を呼び必然となっていく。そしてそこには大きな運命のようなものがあり、淡々と映し出される映像は言葉がほとんど通じないのに、心からの信頼、友情が映し出さる。言葉にするとなんだか陳腐ですが、大きな大きな「愛」なのです。チェリストのエリック=マリアもベトナムの孤児で、風貌もすごく懐かしい感じがします。そして「いのちの授業」という活動をしてきた山田泉さんが主演です。ドキュメンタリーですから、主演というものは何だか変ですが、彼女の生き様もとても心に残るものがあります。ドキュメンタリーはちょっと、うさかた、たくさんいらっしゃると思いますが、是非、チャンスがあったら観てくださいね。 **チェリスト 溝口肇**

きょう久々にオフでご縁玉を観てまいりました。江口さんの人生観、また人間という生物の面白さ、また営みの尊さというものを改めて感じ、感動しました... すばらしい作品でした。ありがとうございます。人への愛しさに涙がこぼれる作品でした。 **ボーカリスト SALYU**

昨日、朝の上野創さんのお計らいで、山田泉さんの講演会場にて、「ご縁玉」を拝見しました。講演の後だったことも多少あったと思いますが、(実際の山田さんにお会いしたあと、という意味です)映画、とてもよかった。山田さん一家とチェリストエリック=マリアさんの交流だけでなく、エリック=マリアさん自身の魂の彷徨と施設の子どものチェロを前にした熱い視線、頭を抱え込む姿、そしてホスピスの方々の聞き入るさま...胸を打つものが重層的で、静かながら圧倒的な迫力がありました。全体に抑制の効いた創意が感じられ、それが逆に、詩の世界のような興行きの深さを感じました。 **ノンフィクションライター 土本亜理子**

僕の安っぽい言葉では表現できませんが、上映中何度も胸が押しつぶされそうな思いになった。ただ良いドキュメンタリーだと簡単に言えない何かがあります。このドキュメンタリー映画には、抱えきれないほど多くのメッセージが詰め込まれていたように感じた。ぜひ多くの人々に見てもらいたい。 **コンテンポラリーダンサー 梅田宏明**

山田先生、ケンちゃんの二人の情の強さ、そして結びつきの強さは、見ていてとても魅力的でした。こんな時期に、こういう形で会うというのは、どこかドキュメンタリーを超えているのかもしれない。 **NHK出版 中村伸**

物欲時代の末期を迎えている昨今、この作品との出会いは一筋の希望の光だった。人間としての本当の意味での勇氣、力強さ。自分にとって生きる事とはどういう事か?その答えがそこにはあった。 **デザイナー 日爪ノブキ**

「ご縁玉」はすごく不思議な映画だね。ドキュメンタリーなんだけど、作品の中でエリックはエリックを演じ、山田さんは山田さんを演じ、カメラが回っていることによって突き動かされるようにどンドン前に行動していく。エリックを沢山の人が会わせようとホスピスに連れて行ったりね。淡々とモニター「こう見るべき」という感じでチェロが流れていて、「こう見るべき」という主張はしていないから、観客が自分で作品を紡いでいく。毎朝作品をみてから出勤したいよね。エリックも非常に魅力的な男だし。 **映画監督 三池崇史**

Voice

泣いた、泣いた。何度も、何度も心を揺さぶられた。いい映画である。11月15日のNHKニュースで、この映画が紹介された。全国放送のニュースで紹介されるといっても過言ではない。それくらいいい映画で、試写をみると、みんなたくさんの人に観てもらいたいと思ってしまうのだから。映画はドラマチックに展開していく。エリック=マリアは、山田さんとの間に魅了され、日本を訪問する。次々が、あつがっていく人間のおもしろさ、すこさが、あつたかな空気のなかで伝わってくる。山田泉のからだにチェロを置き、ゆつたりといやしの音を奏でていく光景は圧巻である。どんな人でも、ハズレなし。ぜひ、ぜひ観てもらいたい映画である。 **医師/作家 鎌田實**

日常生活に追われる現代人がわすれかけていた「思いやり」そして「いたわりの心」を監督の江口方康が問ひかける。パリに拠点を置くチェロ奏者のエリック=マリア、クチュリエが異国日本で末期癌に苦しむ友人山田泉のため、細い糸を手繰るように「想いの旅路」へと旅立つ。温かい視線でとらえた秀作ドキュメント。 **フランス在住 撮影監督 永田鉄男**

■会場周辺図



- * 岡山駅、天満屋バスセンターから徒歩15分
- * 市電東山行「城下」下車 徒歩7分
- ☆ 駐車場はありませんので、公共交通機関か、お近くの有料駐車場をご利用ください。

監督紹介

江口方康(えぐちまさやす)佐賀県出身。東京にて舞台役者の経験後、自身の劇団を旗本にするが、映像の世界へ行きたいがために、1週間の旗本公演で劇団を解散。日本出国、東南アジア、オーストラリアなど、現地で働きながら脚本制作や監督のネットワークを築き、イギリス入居後、現地にある映画学校の学生たちと短期映画の制作に携わる。ロンドンからパリに旅行。ボヘミアンセンター広場に「ハワーマン」を飾り、同年3月ロンドンからパリに移住。現地の映像プロダクションにて日本のTVCFの制作として働く。その後日本のテレビ局にてアシスタント業務をこなす。フランス国立高等音楽学校ルイ・ミエールで学ぶ。フランスにて映像プロダクション、インター・メディアフィルムを設立。短期映画、ドキュメンタリー、TVCF、番組制作、コーディネート、現地ディレクター業務を行う。「ロストロボー・ブッチ 75歳 最後のドンキホーテ」をNHKエンタープライズ21と国際共同制作。カンヌ映画祭で出合った三池崇史監督の助監督として一週日本に帰国。2007年パリにてチェリスト、エリック=マリア、クチュリエと山田泉さんたちに出会い、今回のドキュメンタリー映画『GOENDAMA』を監督することになる。